宮廷行事から読み解く『とはずがたり』

――後深草院二条が描いた光と影――

井上優美

はじめに

本稿では、後深草院二条（以下、「二条」と記す）作の『とはずがたり』[1]における宮廷行事の描写に焦点を当て、物語における意味を探ってみたい。

本作品をテーマに論じる動機は二つある。第一に、鎌倉時代後期の成立から長い期間眠っていたのち、第二次世界大戦後に研究が一気に進んだという作品の歩みに関心を持ったためである。第二に、宮廷行事について深く追究したいと考えたということである。本作品には、巻一の冒頭で描かれた御薬の儀をはじめとして、数多くの宮廷行事が描かれている。現代の日本においても、初詣や成人式などの年中行事は盛んに行われており、古来より人々の生活と行事には深い関わりがあった。長い歴史の中で廃れてしまった行事も多いが、かつて宮廷で催されていた行事が、現代に残る行事の基盤となったことは間違いない。そこで、宮廷行事に焦点を当てることにより、その行事がどのように催されたのか、なぜ作品の描写に行事を取り入れたのかについて探りたいと考えた。本作品に描かれている主要な宮廷行事を取り上げ、行事のルーツを調査し、本作品の行事の描写を中心に読み解いていく。宮廷行事について理解を深め、作者である二条がそれらの行事を作品に描いた真意を解き明かすことを、本稿の目的としたい。

一　御薬の儀

御薬の儀（別名、供御薬）は、屠蘇、百散、度嶂散と呼ばれる薬を正月の三日間、天皇へ捧げることによって、新年の無病息災を祈願するというものである。[2]

本作品は、新春を迎え、二条が十四歳となった頃の回想から物語が展開されている。御薬の儀当日の描写から始まるが、まず疑問に思われるのは、裳着に関する描写がないという点である。女子の成人祝いである裳着ではなく、御薬の儀当日の衣裳を冒頭に描写し、作品のスタートとしたのは、明から暗への転換をはっきりと読み手に示すためではないだろうか。御薬の儀直前を明とするならば、御薬の儀での出来事やその後の宮廷生活の場面は暗と作者は認識していたのだろう。二条の運命を変えることとなった一日の出来事を作品の始まりとすることで、新年を迎え、明るい将来を見据えていた頃と、自身の運命を知り絶望する未来を対照的に描き出すだけでなく、今後彼女の身に降りかかる試練や苦悩を暗示するという狙いがあったのではないだろうか。

二条の父・雅忠と後深草院の間で行われた御薬の儀では、本来の目的に加え、二条の運命を左右する重大な密約が交わされた。この行事における雅忠の役目に着目したい。雅忠は、陪膳と呼ばれる世話役を務め、後深草院への給仕を行っている。本場面の描写にも見られる三三九度の形式は、現代でも婚礼の儀式として受け継がれている。[3] 九返りでの献盃を申し出た雅忠に反して、後深草院はより多くの酒の酌み交わしを希望している。こうした後深草院の言動は、御薬の儀をより盛大に行いたいという願望の表れであろう。酒を酌み交わし、皆が酔っている中、後深草院は雅忠に「この春よりは、たのむの雁もわが方によ」（巻一　一九五頁）という言葉を掛けている。『伊勢物語』第十段の古歌を二条に重ね合わせ、娘である二条を自らのもとに後宮入りさせるよう、雅忠に頼んでいるのだ。こうした後深草院の言動から、今回御所で行われた御薬の儀は、従来のような一年間の無病息災を願うのみに留まらず、彼にとっては成人を迎えたばかりの二条を手に入れるための、とりわけ重大な場であったといえよう。

二条が知らないところで後宮入りの準備が着々と進められていたが、密約の真意を知ることとなったのは、御薬の儀から二週間ほど経った日のことであった。その日の夜、後深草院から長年心の内に秘めていた想いを伝えられ、彼女は驚きのあまり泣き出してしまう。また、巻三の新枕の場面では、後深草院が次のような衝撃的な告白をしている。

わが新枕は故典侍大にしも習ひたりしかば、とにかくに人知れずおぼえしを、いまだ言ふかひなきほどの心地して、よろづ世の中つつましくて明け暮れしほどに、冬忠・雅忠などに主づかれて、隙をこそ人悪くうかがひしか。腹の中にありし折も、心もとなく、いつかいつかと、手の内なりしより、さばくりつけてありし　（巻三　三五五頁）

こうした記述に加え、二条の母・大納言典侍は亡くなる直前、後深草院に対し「形見にも」（巻一　二六六頁）という言葉を遺していることから、後深草院が二条を、かつて自身が恋心を寄せていた大納言典侍の姿に重ね合わせていたことは確かであり、彼は二条の幼い頃から格別な愛情を持って接していたのである。また、二条は雪の曙こと西園寺実兼と幼少期から親しい仲にあった。彼も二条に想いを寄せる一人であり、後深草院が彼女に愛を告げる前に、衣裳に恋文を添えて贈っている。二条は、幼い頃から近しい存在であった雪の曙を一人の男性として意識していたことは確かであり、将来は彼と結ばれるのではないかという淡い期待さえ心のどこかに抱いていたのではないだろうか。しかしながら、御薬の儀で交わされた密約により、二条の期待は裏切られることとなる。二条の運命を左右した御薬の儀は、彼女の人生に最も大きな影響を与えた宮廷行事であったといっても過言ではない。

新年を迎えて行われる行事は、御薬の儀の他にも多数存在した。例えば、元旦に行われる行事の一つ、四方拝である。四方拝とは、一年の災いを払い、幸福を祈願するもので、清涼殿の東庭で天皇が天地四方や山陵、属星[4]を拝むという行事である。[5]この他にも、天皇が元旦に百官の賀を受ける朝賀、[6]公の儀である朝賀と対照的に私儀である小朝拝、[7]朝賀の儀の後に催される宴会としての元日節会[8]など、正月にちなんだ行事のみでも多くの宮廷行事があった。このように、正月には多くの行事が開かれていた中、作者である二条は御薬の儀の場面を冒頭部分に描いている。なぜ二条は、数ある正月行事の中から御薬の儀を選び、作品の始まりとしたのだろうか。

二条はこの行事を描くことによって、彼女自身や雅忠の心境のみならず、後深草院の人物像をも表そうとしたのではないだろうか。御薬の儀では、二条が知らないところで、雅忠と後深草院の間で後宮入りの話が進められている。また、二条が真相を知った際には、彼女の幼き日から想いを寄せていたことを打ち明けており、後深草院が長年の間、二条を自身の後宮女房にさせようと計画していた様子が読み取れる。つまり、御薬の儀を描くことによって、二条は執着心が強く計算高いという後深草院の性格を暗示しているのだ。

さらに、虚構という点からも検証してみたい。本作品には虚構とされる部分も含まれていることが、既に諸先学によって指摘されている。[9]そうした虚構と考えられている（或いは、論理として疑問を呈するとされている）部分と、御薬の儀の描写を作品の始まりとしたことには、何らかの関係性があるのではないだろうか。宮内三二郎氏[10]は、本作品の年立に視点を置いた論文の中で、二条

が重大な何らかの事実を隠すため、年齢を二、三歳若く設定している可能性を指摘した上で、「切れのいい年齢数を設定したのではないか」[11]という憶測を立てている。[12]なぜ彼女は年齢を操作し、実際の年齢よりも若く設定して作品を構成する必要があったのだろうか。ここで、作品の始まりを十四歳という成人にあたる年齢に設定していることに着目したい。裳着や髪上げといった成女式は、おおよそ十三歳前後に行われる儀式であった。[13]つまり、二条は大人となった第一段階の姿から作品を描写しているのである。一つの成長の節目であり、子どもから大人へと変化する十四歳という年齢は、多情多感な時期でもあるはずだ。とりわけ御薬の儀は、後宮入りのきっかけとなり、彼女の人生に大きな変化をもたらした行事でもあった。二条には、人生において最大の転機となった御薬の儀を、十四歳で体験した出来事として描写することで、宮廷生活をテーマとした作品の基盤を形成する狙いがあったのではないだろうか。そのためにも、やはり御薬の儀を作品の冒頭に描く必要性があったのである。

二　蹴鞠

巻二・蹴鞠の場面には、後深草院の弟亀山院が新たに登場する。本場面からは、兄弟である後深草院と亀山院の仲に亀裂が生じていたことや、鎌倉幕府が二人を危惧していたことが読み取れる。

亀裂が生じたのは、文永九年（一二七二年）の後嵯峨院崩御がきっかけであった。二人の関係性について、松村雄二氏は次のように語っている。

（前略）この二人の間に当然のように後嗣をめぐる兄弟争いが起こり、やがて貴族社会あげての皇統争いに発展していきます。すでに亀山の皇子世仁親王（後宇多天皇）が東宮となっていましたし、皇太后大宮院の手で亡き後嵯峨の意向が亀山にあったという遺詔が発表されて、この時は後深草院側は後手を取らざるをえなかったのです。[14]

こうした背景から、亀山院が後深草院よりも優位に立っていたことが読み取れる。また、亀山院について、松本寧至氏は次のように述べている。

亀山院――第九十代の天皇、名は恒仁、後嵯峨天皇第五皇子。母は後深草院と同じく西園寺実氏の女、大宮院姞子である。（中略）父母の寵愛が後深草よりも亀山に厚かったのは、亀山の方が健康的であったからで、父母は将来を亀山に託していたことは、後宇多を皇太子にさせたことでもわかる。[15]

つまり、父母のいずれも、兄・後深草院より弟である亀山院に将来性を見い出していたのである。そうした父母の思いは、亀山院

に劣等感を抱いていたであろう後深草院の心に火を付ける要因となったのではないだろうか。

続いて、鎌倉幕府の視点からも考察したい。なぜ幕府は二人の様子を気にかけていたのだろうか。前出の松本氏は次のように言及している。

（前略）鎌倉幕府としては、朝廷の団結しすぎるのも危険だが、暗闘を繰り広げる両統からの陳情への対応は、そう簡単に処理するわけにはいかない。しかも当時は、元寇への対応にも腐心する国家存亡のときでもあり、北条氏一族でも時宗と庶兄の時輔との争いも片づけたばかりである。[16]

こうした記述から、後深草院兄弟の不和以前に、同時代の北条氏一族の争いがあったことは明らかであろう。北条氏に関する主要な争いの一つとして、文永九年（一二七二年）に起きた二月騒動が挙げられる。「二月十一日、鎌倉において北条氏の有力庶家名越氏の当主時章とその弟教時が討たれ、十五日、京都において六波羅南方探題時輔が討たれた事件」[17]として知られており、『とはずがたり』にも次のように記されている。

さるほどに、十五日の酉の刻ばかりに、都の方におびたたしく煙立つ。「いかなる人の住まひ所、跡なくなるにか」と聞くほどに、「六波羅の南方、式部大輔討たれにけり。その跡の煙なり」と申す。あへなさ申すばかりなし。九日は君の御病の御訪ひに参り、今日とも知らぬ御身に先立ちて、また失せにける、東岱前後のならひ、始めぬことながら、いとあはれなり。

（巻一　二一五―二一六頁）

二条は二月騒動の様子を鮮明に描くとともに、時輔の死を受けて世の儚さを嘆いている。この事件において着目すべきは、時輔の殺害を命じたのが時宗であるという点であろう。異母兄弟という点では異なるが、時輔と時宗の間にも後深草院兄弟のように政治をめぐる複雑な兄弟間の争いがあったことが読み取れる。このような事件がきっかけとなり、その後も鎌倉幕府が政治に関わる争いを案じ、警戒していた様子が想像できる。幕府側が後深草院兄弟の様子に注意を払っていたことは、時代背景から考慮すると自然な流れであったのだ。

では、なぜ後深草院と亀山院は、交流の場に蹴鞠という遊戯を選んだのであろうか。その意義を考えていきたい。蹴鞠の楽しみ方について、池修氏は「蹴鞠には勝敗がなく、鞠を落とさずに蹴り続けることを目的としています。（中略）蹴鞠はお互いを思いやりながら、自分も楽しめるものなのです。[18]」と述べている。本場面には「懸り御覧ぜらるべしとて、御鞠あるべしとてあれば」（巻二二九四頁）と記述があるものの、二人の関係性や蹴鞠の遊戯として

の特質を考えると、意図的に蹴鞠を催したことが明確であろう。蹴鞠は、二人があたかも良い関係性を築いているかの如く、幕府に印象付けるのにぴったりの遊戯だったのではないだろうか。

次に、二条の役割に着目したい。蹴鞠の催しで彼女は世話役を務めている。女房の中からただ一人、亀山院の世話役に選ばれたことを、彼女は誇りに思っていたのではないだろうか。本作品には、衣裳に関する記述が多数見受けられるが、女房である別当殿の衣裳についても次のように綴られている。

半ば過ぐるほどに、二棟の東の妻戸へ入らせおはしますところへ、柳筥に御土器を据ゑて、金の御提子に御柿浸し入れて、別当殿、松襲の五衣に紅の打衣、柳の表着、裏山吹の唐衣にてありしに、持たせて参りて、取りて参らす。

（巻二　二九五頁）

柿浸しが入った提子を運ぶ役目を担っていたのが別当殿であることにも着目したい。こうした描写から、亀山院の接待を任されていたのは二条であるが、別当殿も手伝い役として彼女をサポートしていたことが窺える。二条が自身の衣裳のみならず、別当殿の衣裳まで細やかに綴ったのは、単なる衣裳の記録のためではなく、別の意図があったからではないだろうか。衣裳の描写によって、自身の方が女房として優れていることを強調し、接待という女房として重要な役目を任される力があったことを読み手に印象付けたかったのだろう。また、蹴鞠の直前に、二条にとって今後の宮廷生活に関わる重大な出来事があったことも、描写に関係しているのではないか。女房としての自身の存在を再確認するとともに、自身を鼓舞しているようにも見て取れる。蹴鞠の催しは後深草院兄弟のみならず、二条にとっても女房としての再起を図るという、大きな意味合いを持つ場となったのであろう。

本場面には、後深草院を気遣い、自ら下座に移った亀山院、そして彼の思いを汲み取り、『源氏物語』になぞらえた風流な返しをする後深草院の様子が描かれている。互いを気遣う二人の姿からは、背景に政治をめぐる権力争いがあったことは微塵も感じられない。しかしながら、二条が柿浸しを差し出した際に、亀山院は彼女に「まづ飲め」（巻二　二九五頁）と言葉を掛けている。彼の発言について、松本氏は後深草院への警戒心から二条に毒見をさせていることを指摘し、危険を伴う役を務めた彼女に亀山院は好感さえ抱いたという見解を示している。[19] こうした亀山院の一連の言動は、自身の本心を見せずに後深草院の思考を探ろうとする様子の表れといえるだろう。加えて、後深草院も亀山院を敵対視しているが、本場面においてそのような素振りを一切見せていないことから、後深草院もまた、亀山院に本心を悟られぬよう働きかけ

ながら、相手の出方を窺っていたと考えられる。つまり、座をめぐるやりとりは見せかけの振る舞いに過ぎず、信頼関係を構築することは二人にとって不可能であったのだ。まるで表面を取り繕うかの如く振る舞う二人の様子からは、変わらずに軋轢が生じたままであるという険悪な関係性を窺うことができる。

このようなことを踏まえると、二条が蹴鞠の描写を取り入れたのは、第一に、鎌倉幕府に対する見せかけの交流を続けていた、後深草院兄弟の真の関係性を記したいという思いがあったからではないだろうか。亀山院が二条に毒見を指示したのは、後深草院に対する強い不信感を抱いていたが故の行動であり、二条に毒見を促す亀山院の発言が、後深草院と亀山院の真の間柄を暗示しているといえよう。第二に、政治をめぐる闘争が頻繁にあった当時の時代背景を作品に遺したいという思いがあったからではないだろうか。皇統をめぐる闘争が兄弟間に留まらず、後世にも影響を及ぼしていることに注意したい。また、父・後嵯峨院に関して、上横手雅敬氏は次のように述べている。

> 後堀河天皇の皇子の四条天皇が没して皇嗣がなく、土御門上皇の皇子と順徳天皇の皇子が皇位を争ったとき、幕府は貴族たちの反対をおしきって前者を即位させた。これが後嵯峨天皇である。かつて討幕に積極的であった順徳の皇子の即位を、幕府はきらったためであるが、これもやはり臨時の措置であった。[20]

後嵯峨院が即位する際にも、皇位をめぐる争いがあったという。討幕が起こらぬよう、鎌倉幕府が警戒しながら即位させる人物を選んでいた様子も読み取れる。鎌倉時代には権力争いによって多くの乱闘が起きていたことから、貴族たちの苦悩、そして当人たちのみならず、周囲の人々も暴動が起きる日々に不安を抱えながら過ごしていたのではないかと考えられる。二条は、後深草院兄弟による蹴鞠を場面に取り入れることによって、政治をめぐる彼らの複雑な関係性を暗示するとともに、権力によりこの時代を生き抜こうとする貴族たちと、彼らによる討幕を警戒する鎌倉幕府の対立を示唆しようとしたのではないか。

また、二条が亀山院を接待する役目を務めており、自身の衣裳についても細やかに綴っていることや、本場面が再起を図る重要な場であったことを忘れてはならない。闘争が多く波乱に満ちていた鎌倉という時代に宮廷女房として仕えていた、自身の誇りある姿を書き留めておきたいという彼女の思いも、少なからずあったと稿者は考える。

三　粥杖

小正月に催される行事の一つに、七種粥を宮廷へ献ずるもちがゆの節供[21]という催しがあるが、その粥を調理した際の燃え木を削り、杖にしたもので女性の尻を打つといった遊びが、粥杖[22]という行事である。この杖で子どもがいない女性の腰や尻を打つことにより、男児を身籠るという説や、必ず子どもが誕生するという説があり、夫婦のみならず屋敷の女性同士でも打ち合うことや、女性が男性を狙って腰を打とうとすることもあったという。

巻二は、二条が十八歳を迎えた新年から描写が始まる。春を迎えた御所では、二方に分かれ勝敗を争う、方分かちの形式で粥杖が行われた。この催しでの後深草院や近習の男性たちの振る舞いに反感を持った二条は、東の御方と話し合い、後深草院を粥杖で打ち返すことに成功したが、こうした行動が御所での騒ぎに発展した。これが粥杖事件である。

後深草院らの協議により贖いが決まっていた二条であったが、事件の首謀者という立場にありながらも、贖いを免れることとなった。本場面には、二条の代わりに彼女の親族が贖いを受ける様子が描写されている。四条家が贖いを受けた後、次に目を向けられたのは、父方の家系である久我家であった。しかし、隆顕から贖いを求められた久我の尼上は、幼少期より二条が御所で育てられたことを挙げ、「君の御不覚とこそおぼえさせおはしましさぶらへ。」（巻二　二九一頁）などと返事をし、加えて次のように述べている。

雅忠などやさぶらはば、不憫の余りにも贖ひ申しさぶらはむ。わが身には不憫にもさぶらはねば、不孝せよの御気色ばしさぶらはば、仰せに従ひさぶらふべくさぶらふ（巻二　二九一頁）

贖いへの拒否のみならず、二条との関係性をも断ち切るかのような発言であり、孫の二条を贔屓するような素振りは見られない。冷酷ともとれる久我の尼上の言動に、二条はどのような思いを抱いたのだろうか。三角洋一氏は、二条が置かれていた立場、そして彼女と贖いを受けた人物との関係性に着目し、次のように述べている。

（前略）作者は久我家の出でありながら、父方に頼りとなる有力な後見者はなく、わずかに母方の祖父隆親を後ろ楯として、じっさいには叔父隆顕の世話にあずかり、宮仕えをつづけていました。（中略）院の愛情を頼りとするよりほか、後宮に身の置きどころはないのだと思い知らされたのです。[23]

また、藤田一尊氏は粥杖事件について、「この出来事は二条に、本当の庇護者が存在しない身の上であることを思い知らせたに違い

ない。」[24]と言及している。こうした記述から思い浮かぶのは、父母を亡くした二条が、今後孤独を抱えながら宮廷生活を送る姿ではないだろうか。

しかしその一方で、巻一の場面には、晴れの準備に久我の尼上も加わっている様子が描写されている。この描写からは、久我の尼上と二条が不仲、もしくは疎遠であるといった様子は感じられない。それなのに、粥杖事件の描写では、贖いを断った上、養育者ではない自身に責任を取る必要性はないことを強く主張している。つまり、祖母という二条と非常に近い立場である久我の尼上さえも、彼女を庇護しようとしない様子がはっきりと描かれているのだ。

本場面には、方分かちによって二方に分けられ、対戦形式で粥杖の催しを行った様子が描写されている。二条はこの分け方についても細やかに記述している。

相手、みな男に女房合せらる。春宮の御方には、傅の大臣を始めて、みな男、院の御方は、御所よりほかはみな女房にて、相手を籤に取らる。傅の大臣の相手に取り当る。

（巻二　二八四頁）

こうした描写から、後深草院の皇子である熙仁親王側と後深草院側に分かれて粥杖が行われたこと、また、女房たちにただ一人、男性である後深草院が加わっているものの、男性対女性という対戦の構図があったことが明らかであろう。では、なぜ粥杖に方分かちの形式、そして男性対女性という構図を取り入れたのであろうか。方分かちのように対戦形式が用いられていた、或いは男女別に分かれていた主要な遊戯に焦点を当て、そのヒントを得たい。

まず、対戦形式が用いられていた遊戯の一つとして、双六が挙げられる。当時の双六は、次のような遊戯であった。

二人の競技者が、自分の駒を相手の陣に早く送り込むことを競う盤上遊戯。相対する十二枠の陣を持つ盤に駒となる石を並べ、賽を筒に入れて振って出た目の数だけ駒を進める。それぞれの持ち駒の数については、六個、十二個、十五個など諸説がある。[25]

現代にも残る伝統的な遊びであるが、賽の振り方により進む数が決まるといった遊び方は、古くから変わらないようだ。『枕草子』に、双六に関する描写が確認できる。次の引用は、第一三三段である。

つれづれなるもの　所さりたる物忌。馬おりぬ双六。除目に司得ぬ人、家。雨うち降りたるは、まいていみじうつれづれなり。[26]

続いて、第一三四段を引用する。

つれづれなぐさむもの　碁。双六。物語。三つ四つのちごの、物をかしう言ふ。また、いと小さきちごの物語し、たがへなど言ふわざしたる。くだ物。男などのうちさるがひ、物よく言ふが来たるを、物忌なれど、入れつかし。[27]

いずれの描写も、対戦の様子について細やかには記されていないが、第一三三段からは、盤の前で頭を悩ませながら対戦している人々の様子が目に浮かぶようである。さらに、第一三九段にはより詳しい記述が確認できる。

清げなるをのこの、双六を日一日打ちて、なほ飽かぬにや、短き灯台に火をともしていと明かうかかげて、かたきの賽を責めこひて、とみにも入れねば、筒を盤の上に立てて待つに、狩衣の頸の顔にかかれば、片手して押し入れて、こはからぬ烏帽子振りやりつつ、「賽いみじくのろふとも、打ちはづしてむや」と、心もとなげにうちまもりたるこそ、ほこりかに見ゆれ。[28]

また、『源氏物語』にも、双六の描写が確認できる。次の引用は、「常夏」巻における双六の場面である。

やがて、この御方のたよりに、たたずみおはしてのぞきたまへば、簾高くおし張りて、五節の君とて、されたる若人のあると、双六をぞ打ちたまふ。[29]

この場面に描かれているのは、近江の君対五節の君、すなわち女性同士の対戦である。一方で、『枕草子』における双六の場面では、対照的に男性同士の対戦が描かれていた。こうした描写から、双六という遊戯が性別によらず娯楽の一つとして親しまれ、愛されていた遊戯であったことは確かである。加えて、『枕草子』や『源氏物語』といった平安時代を代表する文学作品に、このような勝敗を争う対戦形式の催しが描写されていることから、ただ遊戯を催すだけではなく、さらなる娯楽の楽しみ方として、双六のような対戦による遊戯が当時の人々の間に浸透していたと考えられる。

続いて、複数人で対戦した催しについて検証したい。その一つとして、絵合が挙げられる。絵合とは「物合せの一つで、左右に分かれて絵を合わせて競う遊戯」[30]のことである。『源氏物語』「絵合」巻に、その描写が確認できる。

中宮も参らせたまへるころにて、かたがた御覧じ棄てがたく思ほすことなれば、御行ひも怠りつつ御覧ず。この人々のとりどりに論ずるを聞こしめして、左右と方分かたせたまふ。梅壺の御方には、平典侍、侍従内侍、少将命婦、右には大弐典侍、中将命婦、兵衛命婦を、ただ今は心にくき有職どもにて、心々に争ふ口つきどもをかしと聞こしめして、まづ、物語の出で来はじめの親なる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合はせて

争ふ。[31]

また、山中裕氏は「絵合」巻の描写から、物合という遊戯について次のような見解を示している。

（前略）この裏面には藤壺と弘徽殿女御との醜い争いがすでに潜在していたことは見逃し得ない。そしてこの戯に勝った藤壺側は、その後大いに勢力を張っていくのである。このようにみてくると、平安貴族社会に行なわれた物合は、表面は風流で美的なものであったが、その裏面には、ときたま家と家との勢力争いや、個人同士の争いがあったことが少なくないのである。[32]

ここでの対戦も、方分かちの形式で同性同士である。絵合という遊戯の背景には、宮中をめぐる彼女たちの白熱した戦いがあったのだ。

さて、再び『とはずがたり』の描写に視点を置きたい。方分かちでの対戦を申し出ているのは春宮であり、粥杖が催されたのは、春宮がその役職に就いて間もない頃であった。本来の粥杖は、呪術的な力のあるものとして、また小正月の遊戯として催されるものであるが、ここでの粥杖は、皇子が春宮という役職に就いたことの祝いとしての意味合いが強い。春宮による方分かちの提案は、晴れて役職に就き、父である後深草院と対戦したいという思いからであったのではないか。加えて、当時の人々が対戦による遊戯を盛んに催していたことから、粥杖にも方分かちを取り入れ、御所で盛大に催したいという狙いがあったとも考えられる。また、前述した双六、絵合には、いずれも男女で対戦するという形式は見られなかった。遊戯において同性同士の対戦が主流であった中、敢えて男女にチームを分けたのは、色好みである後深草院の意向であったのだろうか。

御薬の儀をきっかけに、様々な苦悩を抱えていた二条は、周囲とは異なる感情を抱いていたに違いない。二条は粥杖をどのように捉えていたのであろうか。ここで、絵合の性質を思い出したい。絵合を含む物合と呼ばれる遊戯は、美しさを秘めながらも、背景には家同士や個人間の衝突があった。今回の粥杖では、後深草院とその皇子を筆頭にした対決であることから、家同士の衝突は見られない。しかし、個人間の衝突を女房同士の衝突に置き換えて考えることはできないだろうか。方分かちによる粥杖の後、二条は周囲の女房たちと企み、後深草院に仕返しをするが、その際、東の御方に罪を着せるような発言をしていることから、東の御方を二条が陥れようとしている一つの構図が浮かび上がる。女房たちによる手助けがあったとはいえ、報復の計画を立て、実行に及んだ二条には、まるで最初から罪を免れようという意識があった

かのように感じられる。つまり、この粥杖は二条にとっては単なる男女の対戦ではなく、女房同士の戦いでもあったのだ。二条は粥杖事件を描くことにより、表向きの華やかな遊戯のみならず、背景にある女房の葛藤をも巧みに描き出し、宮廷女房として残ることの厳しさ、苦悩を訴えているのではないだろうか。

粥杖事件を通してみられる、こうした女房たちの戦いはさらに続く。引き続き、次の章で詳しく述べたい。

四　女楽

女楽とは、『源氏物語』「若菜下」巻にみられる楽器の演奏会のことである。次の引用は、その場面である。

今日の拍子合はせには童べを召さんとて、右の大殿の三郎、尚侍の君の御腹の兄君笙の笛、左大将の御太郎横笛と吹かせて、簀子にさぶらはせたまふ。内には、御褥ども並べて、御琴どもまゐりわたす。秘したまふ御琴ども、うるはしき紺地の袋どもに入れたる取り出でて、明石の御方に琵琶、紫の上に和琴、女御の君に箏の御琴、宮には、かくことごとしき琴はまだえ弾きたまはずやとあやふくて、例の手馴らしたまへるをぞ調べて奉りたまふ。[33]

「若菜下」巻には、正月の二十日頃に女房たちが集まり、琵琶をはじめとした品格のある弦楽器を演奏する様子が描かれている。女楽という行事が、貴族であるからこそ催すことができた特異な演奏会であったことが窺える。一見すると女房たちによる華やかな催しであるが、背景には紫の上のように人知れず苦悩を抱えている者もいた。

『とはずがたり』において女楽事件の発端となったのは、小弓と呼ばれる遊戯である。小弓とは、次のような催しであった。

小さな弓で矢を射る遊戯。左膝を立てて座し、膝に左肘を置いて、右手で射る。小弓合として、左右に分かれて勝負を争った。[34]

対戦形式や小弓合という呼び名から、物合の一種であったと考えることができる。『枕草子』第二〇二段の「遊びわざは　小弓。碁。さまあしけれど、鞠もをかし。[35]」という記述から、小弓が碁や蹴鞠と同様に、当時の人々にとって身近な遊戯であったことが窺える。後深草院と亀山院の間で行われた小弓には、勝負に罰ゲームを加える趣向を凝らし、女房たちをも巻き込んでいることから、催しをより派手に行いたいという願望があったと考えられる。この勝負に後深草院が負けた罰として、伏見殿において『源氏物語』の女楽を真似た催しが行われることとなった。配役について、次のように綴られている。

紫の上には東の御方、女三の宮の琴の代りに、箏の琴を隆親の女の今参りに弾かせむに、隆親、ことさら所望ありと聞くより、などやらむ、むつかしくて、参りたくもなきに、「御鞠の折に、ことさら御言葉かかりなどして、御覧じ知りたるに」とて、「明石の上にて、琵琶に参るべし」とてあり。

（巻二　三一八―三一九頁）

こうした記述から、二条が女楽への参加に前向きではなかったこと、その背景には隆親が関係していたことが読み取れる。今参りが務める女三の宮は、次のような人物であった。

源氏の異母兄**朱雀院の姫宮**。朱雀院はこの女三の宮を偏愛し、その結婚相手に、後見者としてもっとも頼りになるとして源氏を選ぶ。朱雀院の懇請は、源氏にとっても青天の霹靂であった。[36]

続いて、二条が務める明石の君はどのような人物であったのだろうか。

源氏の母桐壺の更衣の従兄妹**明石の入道の娘**。一人娘を都の高貴な人と結婚させたいという願望を持つ入道は、須磨に流されてきた源氏に目をつけ、目的を遂げる。[37]

ここで、両者を比較したい。女三の宮は、源氏に降嫁した人物であり、朱雀院の娘であるという家系からも、身分が高い人物であることが窺える。一方で、明石の君は女三の宮よりも身分が劣る人物であった。彼女の身分について、三角氏は次のように言及している。

彼女は『源氏物語』では「御方」と呼ばれますが、「上」とは一度も書かれません。いちおう尊んで「御方」と書いていても、源氏の「上」、すなわち北の方とは呼ばないのです。明石の上は前播磨の守の娘ですから、受領の娘で、四人の中で桁違いに身分が低い。[38]

このように、親が受領である明石の君は、女三の宮のみに限らず、女楽に参加した他の女房よりも格段に身分が劣る人物であった。

さて、『とはずがたり』の女楽の描写に再び焦点を当てよう。二条は、今参りを優遇する態度を見せた隆親に対し不快感を示した上で、琵琶に関する自身の華麗な経歴について記している。また、彼女は「いたく心にも入らでありしを」（巻二　三一九頁）という表現を繰り返し用いている。あまり琵琶の練習に熱心ではなかったことを強調する一方で、幼いながら雅楽などを習得し、後嵯峨院から褒美を受け取ったという栄誉について自慢げに語る二条からは、琵琶の腕に対する絶対的な自信と、琵琶を伝統とする久我家の出身であることへの誇りを大いに感じる。しかしながら、自身が得意とする琵琶を、女三の宮より身分の劣る明石の君役として

弾くよう強いられたのだ。

では、女楽において要望を出した隆親には、どのような狙いがあったのだろうか。女楽当日の場面には、今参りが厚遇を受ける様子が示されている。家紋入りの車、そして侍とともに参上したという姿は、今参りの父・隆親の権力の表れといえよう。女房たちの座る位置にまで口を挟んだ隆親の言動からは、娘である今参りを女楽において目立たせようと企んでいる様子が窺える。彼は粥杖事件の際、二条の外祖父として贖いを受けた人物でもあるが、本場面ではまるで手のひらを返したように、強硬で高圧的な態度を取っている。叔母・姪という関係性を指摘し、二条を下座させようとする隆親には、ただ今参りを女楽の主役にしたいのではなく、政治的な企みがあったのではないだろうか。松本氏は、隆親について次のように言及している。

もちろん二条も孫ではあるが、外孫よりわが子をこれから社交界に売り出すことに必死だったのだろう。この識子は、のちに花山院権大納言定教の妻となるが、伏見天皇の乳母、典侍となり、従一位、鷲尾一品と称されるまでに出世した。[39]

識子というのは、今参りの名前である。彼女の経歴からは、その後女房として力をつけていったことが明らかである。こうした今参りの歩みは、隆親の導きがあったからこそ実現したものであり、隆親が自身の出世や今参りの将来を案じて奔走していた姿が容易に想像できる。さらに、後の場面には、彼と隆顕の関係が円満でなく、亀裂が生じている様子が描かれている。

さるほどに、善勝寺の大納言、ゆゑなく剝がれぬること、さながら父の大納言が仕事やと思ひて、深く恨む。当腹隆良の中将に宰相を申すころなれば、この大納言を参らせ上げて、我を超越させむとすると思ひて、同宿も詮なしとて、北の方が父、九条中納言家に籠居しぬるよし聞く。

（巻二　三二五―三二六頁）

隆親は隆顕の役職を借り、後宇多天皇、そして後に伏見天皇となる熙仁親王の元服後に大納言の座を返還する約束であったが、隆顕のもとに役職が戻ることはなかった。さらに、権大納言には隆顕ではなく藤原経任が抜擢されている。本場面からは、父に裏切られたことへの憎しみや恨み、そして隆親に対する隆顕の強い不信感が窺える。さらに、隆顕を差し置き、同じく隆親の息子である隆良を優遇し、彼を出世させようと仕向けている様子が色濃く描かれている。このことから、隆親は自身の子どもたちに政治における優先順位をつけ、息子や娘たちの出世を手助けするとともに、自身の社会的地位を確立し、政治への権力を強めていったと考えられる。女楽において今参りを女三の宮役にするよう希望し

たり、二条に下座させるといった隆親の言動には、催しをきっかけに今参りに注目を集め、彼女の出世に繋げようという父、そして政治家としての執念があったのではないだろうか。粥杖事件での贖いにおいて、二条は自身に庇護者がいないという事実を悟っていたが、心のどこかでは自身の味方がいることを信じていたのだろう。しかしながら、彼女の僅かな希望は女楽事件によって失望に変わったのである。

二条は御所を退出する際、ある大きな決断をしている。それは、久我家の伝統である琵琶を自ら手放すことであった。後深草院に書き置いた手紙の内容からは、強気な様子は微塵も感じられず、普段の二条には見られない言葉ばかりが並べられていた。二条は御所を退出した後の心情を次のように語っている。

よきついでに憂き世を逃れむと思ふに、師走のころよりただならずなりにけりと思ふ折からなれば、それしもむつかしくて、しばしさらば隠ろへ居て、このほど過ぐして、身々となりなばと思ひてぞ居たる。（巻二　三二三頁）

彼女はこのとき懐妊していたことから出家を断念しているが、出家に対する意志は固いものであったことが窺える。御所を退出するという彼女の行為は決して衝動的なものではなく、冷静に先を見据えた上での揺るぎない決断だったのだ。

ここで、後深草院の言動に着目したい。二条が御所を退出した経緯を知り、「ことわりや、あが子が立ちけること、そのいはれあり」（巻二　三二二頁）と述べている。後深草院の言葉からは、二条に同情し、彼女を庇う姿勢を見せていることが窺える。加えて、周囲も二条を擁護する姿勢を見せ、「兵部卿うつつなし。老いのひがみか。あが子がしやう、やさしく」（巻二　三二三頁）と口々に言う様子が描写されている。後深草院は日頃から二条を「あが子」と呼んでいたことから、後深草院が筆頭となって発言した言葉であること、二条を擁護する姿勢を見せていたことは確かであろう。

しかし、後深草院らが見せた二条への同情は、果たして本心だったのであろうか。粥杖事件では、二条の周囲の人々が贖いを免れようとする様子が描かれている一方で、女楽事件では、後深草院を筆頭に、御所を飛び出した二条に同情する様子が描かれている。つまり、粥杖事件と女楽事件における周囲の様子は、相反する描写となっているのである。また、女楽が小弓の罰ゲームであったことから、彼女が屈辱を味わうこととなる環境をつくったのは後深草院自身であるといえよう。本場面にみられる同情は、本心ではなく見せかけに過ぎなかったのではないだろうか。

父母を早くに亡くした二条は、外祖父の隆親の力さえ借りることができない環境にあった。一方で、隆親を父に持つ今参りは、

まるで二条の苦悩を知らないかのように優遇されている。二条には、隆親という後ろ盾をつけ、今後も出世の道を進んでいくであろう今参りの晴れやかな将来が想像できたのだろう。こうした光景を目の当たりにし、後ろ盾を持つ今参りに嫉妬心を抱く反面、隆親の権力や今参りの社会的立場は、自身の力ではどうにもならないと悟ったのではないだろうか。そうした心境が、出奔や琵琶を奉納するといった行動に表れているといえよう。

二条は今参りへの嫉妬心を明らかにはせず、あたかも配役に大きな不満があったかのように記している。こうした物言いは、二条の勝気な性格ゆえの表現ではないだろうか。彼女は自身のプライドを守るため、今参りに嫉妬しているという事実は隠したかったのであろう。しかしながら、自身の華麗な琵琶の経歴について長々と語ったり、今参りの院参の様子をかつての自身に重ねた描写からは、今参りに対抗心を燃やし、まるで私も今参りのような華やかな道を歩んでいくはずだったという、やり場のない思いを読み手に訴えかけているようにも感じる。女楽事件は、彼女の人生における迷いや葛藤のみならず、粥杖事件に続く女房同士の戦いとして作品に描かれたのである。

おわりに

以上、『とはずがたり』における主要な四つの宮廷行事である御薬の儀、蹴鞠、粥杖、女楽を取り上げ、二条がそれらの行事を描いた真意を探るべく、考察を行った。

宮廷行事に関する描写には日常の記録以上の意味合いがあり、その場面の一つひとつには、作品を読み解く上で欠かせないメッセージが秘められている。二条は自身が成長していく姿を作品に描き出しており、その長い宮廷女房としての生活において、時には不遇な体験をし、感傷に浸ることもあったが、喜ばしいことのみならず、そのような心の傷も彼女の人生を形成する要素となったことは間違いないだろう。明るい未来を描き、自信に満ち溢れていたであろう成女式直後の頃から、出家後の自身の姿まで事細かに綴られている『とはずがたり』は、二条が後宮女房として生きた証なのである。彼女は久我家出身の父、四条家出身の母という家柄に生まれ、本来であれば明るい未来が約束されていたが、両親の早世によって悲運にも逆境を歩むこととなった。彼女はそうした逆境をただ単に記すのではなく、宮廷行事の描写を通して自身が経験した出来事を鮮やかに描いているのである。

二条が『とはずがたり』に宮廷行事を記述する意義、それは宮

廷生活における光と影を表現することにあったのではないだろうか。一見、華やかで優雅な印象を受ける宮廷生活であるが、二条は両親の死後、孤独や不安を抱えながら日々を過ごしていた。彼女が過ごした日々は、宮廷生活の煌びやかなイメージとはかけ離れたものであったといっても過言ではない。二条は、本作品を執筆するにあたり、宮廷生活の日常と自身に降りかかった出来事を、光と影になぞらえたのである。華やかさの背景に隠された、二条、そして彼女の周辺に降りかかる暗雲を、影として描くことこそが本作品の執筆の動機であり、『とはずがたり』の本質といえるのではないだろうか。宮廷行事が特別で雅なものであるからこそ、その奥に隠された影が浮かび上がってくるのである。

注

（1）本論文における『とはずがたり』本文の引用は、全て久保田淳『新編日本古典文学全集47　建礼門院右京大夫集／とはずがたり』（一九九九年、小学館）に拠った。

（2）阿部猛 他 編『平安時代儀式年中行事事典』（二〇〇三年、東京堂出版）

（3）松村雄二『『とはずがたり』のなかの中世』（一九九九年、臨川書店）

（4）属星に関して、山中裕氏は『平安朝の年中行事』（一九七二年、塙書房）で「北斗七星のなかで生年にあたる星」（九四頁）、江馬務氏は『有職故実〈日本の美と教養〉5』（一九六五年、河原書店）で「北斗七星の中でその年に属する星」（二〇六頁）と定義している。

（5）四方拝の説明は、前掲書を基に纏めた。

（6）江馬務『有職故実〈日本の美と教養〉5』（一九六五年、河原書店）

（7）山中裕『平安朝の年中行事』（一九七二年、塙書房）

（8）前掲書

（9）本作品における虚構性については、多くの研究者によって指摘されている。西沢正史、藤田一尊『日本の作家１００人　後深草院二条――『とはずがたり』の作者』（二〇〇五年、勉誠出版）において、藤田氏は「書写段階における誤写や誤脱も数多く見られる上に、二条自身の記憶違いと思われる点や、積極的に虚構を用いていると見受けられる記述も少なくない。」（二頁）と述べている。このほか、水原一氏は虚構に視点を置き、「『とはずがたり』の虚構性をめぐって」（今井卓爾 監修『女流日記文学講座　第五巻　とはずがたり・中世女流日記文学の世界』、一九九〇年、勉誠社）を発表している。

（10）宮内三二郎氏が、「「とはずがたり」年立の再編成＊――「とはずがたり」異説　その1――」（鹿児島大学教育学部『鹿児島大学教育学部研究紀要，人文・社会科学編』、一九七五年、鹿児島大学）において、「一体に，年立におけるこの種の矛盾は，とかく虚構ということで説明されていることが多い。（中略）虚構そのものの存在を決して否認する者ではなく，むしろその反対であるが，矛盾を虚構に帰着させるには，よほどの慎重さと，納得の行く合理的な説明が必要だと思う」（二〇頁）と述べていることには注意したい。

（11）前掲論文、二四頁

(12) (10) に同じ
(13) 『源氏物語大辞典』編集委員会編『源氏物語入門』(二〇〇八年、角川学芸出版) には、髪上げは「女子の成人式にともなって、髪を結い上げること。」(一八一頁)、裳着は「女子の成人式。女子が成人したしるしとして初めて裳を着ける儀式。裳着の年齢は一定していないが、おおよそ、十二歳から十四歳頃に行われた。」(一八一頁) と定義されている。
(14) (3) に同じ、八一頁
(15) 松本寧至『女西行―とはずがたりの世界―』(二〇〇一年、勉誠出版)、一二三―一二四頁
(16) 前掲書、一二四頁
(17) 細川重男『北条氏と鎌倉幕府』(二〇一一年、講談社)、一〇八頁
(18) 池修『日本の蹴鞠』(二〇一四年、光村推古書院)、一三頁
(19) (15) を要約した。
(20) 上横手雅敬『鎌倉時代――その光と影』(一九九四年、吉川弘文館)、二五八頁
(21) (7) に同じ
(22) 粥杖に関しては、注三、七、三角洋一『とはずがたり (古典講読シリーズ) 岩波セミナーブックス一〇四』(一九九二年、岩波書店) を基に纏めた。
(23) 三角洋一『とはずがたり (古典講読シリーズ) 岩波セミナーブックス一〇四』(一九九二年、岩波書店)、九九頁
(24) 西沢正史、藤田一尊『日本の作家100人 後深草院二条――『とはずがたり』の作者』(二〇〇五年、勉誠出版)、四〇頁
(25) (13) に同じ、二〇六頁
(26) 松尾聰、永井和子『新編日本古典文学全集18　枕草子』(一九九七年、小学館)、二五三頁
(27) (26) に同じ、二五四頁
(28) (26) に同じ、二六七頁
(29) 阿部秋生 他『新編日本古典文学全集22　源氏物語③〈全六冊〉』(一九九六年、小学館)、二四二頁
(30) (13) に同じ、二〇四頁
(31) 阿部秋生 他『新編日本古典文学全集21　源氏物語②〈全六冊〉』(一九九五年、小学館)、三八〇頁
(32) 山中裕『平安時代の古記録と貴族文化』(一九八八年、思文閣出版)、四八八頁
(33) 阿部秋生 他『新編日本古典文学全集23　源氏物語④〈全六冊〉』(一九九六年、小学館)、一八六―一八七頁
(34) (13) に同じ、二〇六頁
(35) (26) に同じ、三三七頁
(36) 瀬戸内寂聴『源氏物語の女君たち』(二〇〇八年、日本放送出版協会)、一四五頁
(37) 前掲書、一二七頁
(38) (23) に同じ、一〇三―一〇四頁
(39) (15) に同じ、一三〇頁

(二〇一八年度卒業)